

## 彦根城博物館所蔵『今昔物語』卷五の本文の位置づけ

中根 千絵

はじめに

論者は、『説林』五三号において、彦根城博物館所蔵『今昔物語』（全巻、表紙の題は『今昔物語』と書いてあるが、内題には『今昔物語集』とある。）の紹介を行ったが、その際、本の空白部分の分析、流布本系共通脱文の分析から、彦根城博物館所蔵『今昔物語』は、内閣文庫本Bに近い流布本系の本であり、内閣文庫本Bより良い本であろうと論じた<sup>①</sup>。しかし、その位置づけが正しいかどうかは、諸本との一語一語の比較を経て、初めて、立証されるものである。卷一については、先に論集で分析を行い、彦根城博物館本は内閣文庫本Bとのみ一致する箇所が多く、これは、『説林』五三号で論じたのと同じ傾向であるが、旧日本古典文学大系の底本である東大本甲や東北大本、野村本とのみ一致する箇所もあり、彦根城博物館所蔵『今昔物語』は、流布本系諸本（内閣文庫本ABC、東大本乙）と古本系諸本（東大本甲、東北大本、野村本）の間の状態を有する希有な本であるということを述べた<sup>②</sup>。卷二の場合は、鈴鹿本という原本に近い本が残っているせい<sup>③</sup>か、古態を残すとされる東大本甲、東北大本、野村本と一致する箇所は非常に少ないという結果が得られた<sup>④</sup>。卷三では、特に、野村本が流布本系と古本系との狭間で揺れている様を見ることができた。また、様々な要件から、流布本系は、校訂本文を目指した書物群ではなかったかと推測した。但し、彦根本のよ

うに、中間的な表記を有する書物の場合には、いまだ、そのどちらとも見定めがたいとし、今後、さらに、巻ごとの分析を続け、彦根本の性格を見極めると共に、古態本と流布本の総合的な分析を行っていきたいとした。<sup>(4)</sup>巻四の場合に顕著な傾向として現れるのは、古本系との一致度が高く、内閣文庫本Bとの一致度は低いということである。これまで、彦根城博物館本は古態本と流布本の中間的な本として位置づけてきたが、巻四にいたって、古態本の表記を有することが判明したことにより、改めて、彦根本の位置づけを考えてみなければならぬこととなった。<sup>(5)</sup>従って、巻五についても引き続き、彦根城博物館所蔵『今昔物語』の本文を他の諸本と比較することにより、彦根博物館所蔵『今昔物語』巻五の位置づけを試みることにしたい。但し、諸本の収集は、いまだ、その途上にあり、旧日本古典文学大系『今昔物語集』の校異と頭注から必要な部分を抜き出す形で、諸本との比較を行うこととする。

### 彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻五の本文異同

#### 凡例

一番上の段は旧日本古典文学大系のページと行、次の段は彦根城博物館所蔵本の本文、次の段は彦根城博物館所蔵本と同じ本文を持つ本の種類である。(但し、異体字などの字形が異なるものについてはこれに含め、その都度指摘した。)★印は彦根城博物館所蔵本独自の部分であり、その部分については諸本の例を示した。旧日本古典文学大系に載る考察は必要に応じて「」に入れて付した。

各本の略語は次の通りである。

底―旧日本古典文学大系『今昔物語集』の底本(鈴鹿本)【旧日本古典文学大系『今昔物語集』の底本が現在の諸本のうちの古態本にあたると思われることから、底の字を使うことで、それが一見して明らかとなるようにした。】

北―東北大本 野―野村本 以上古本 甲―東大本甲 乙―東大本乙 A―内閣文庫本A B―内閣文庫本B C―  
 内閣文庫本C 以上流布本 鈴鹿本を除く諸本―諸  
 彦―彦根城博物館所蔵本  
 大―旧日本古典文学大系

卷五目録

三三七 東城國(第二十二) 諸

卷五第一話

三三八 5 南指テ

5 吹行ク

5 射ル如シ

7 千人

11 忘ニタリ

14 高ク

15 細々

15 一人モナシ

諸大「南ヲ指テ」C

乙ABC

乙AC

ABC

諸大「忘タリ」ABC

「目的格表現に助詞を使用しない例。」

乙ABC

北乙A (北乙Aは「細々」)

★ 「二人无シ」底甲北野大「一人モ無シ」乙AC

Bは脱

三三九 1 毎日

乙 A C

1 顔

乙 A B C

4 三ノ

乙 A B

6 多クアリ

B C

8 風ニ被放テ

B C (Cのテは朱補)

8 此ノ間ニ

乙 C

9 見ト見ル人

乙 A B

10 胸筋ヲ

野乙 A B C (野乙 Aの胸は変、Bは月×匂)

10 目ヲコソ

乙 A B C (乙のコはユに近し)

12 逸給ヘト

乙 A B C (Bの給は玉)「逸給ヘテ」底甲北野大(北はへをとと訂す)

16 補陀落

乙 A

16 音

底甲北野

三四〇 1 西ノ方ヨリ

乙 A B C

1 臥テ

A C

5 四五丈踊リ拳リツ

B (ツの下にツ歟と朱補)

6 思ヒ出ラル

乙 A C

6 搔キ斫ヒテ

諸 (C傍訓カ・ツクロ)

14 嗶ル声ヲ

B「嗶シル声ヲ」乙 A C「嗶ル音ヲ」北野「皇シル音ヲ」底大「甲は破損のため不明」

「皇は嗶の省文と考えられる。」

- 三四一 1 打解ヌヘシ 底甲北野
- 3 然ルニ 乙ABC
- 3 訴ヘ申サム 乙ABC (Bのムはン)
- 4 カノ 北乙AC
- 4 無並 乙B (乙Bは無)
- 7 殺セル 乙ABC
- 10 壞抱後ハ 乙
- 10 國政ヲ 乙ABC (乙ABCは国)
- 11 出来ナムス 乙A
- 12 女ニ變シタル也 乙B (Bの也はナリ)
- 13 場ニ ABC (C傍訓ニハ)
- 三四二 1 御髮シ 底乙ABC (Bはシに朱圈点)
- 3 申シテ 北C
- 4 奉ラムト 乙AC
- 5 帯セラレム兵 乙AB (Bのムはン)
- 5 百駿舟ニ 乙ABC (Bは舟の右肩にイと朱傍、C傍訓シユンフネ)
- 6 出立シヌ 乙AC
- 8 美麗ナル女 乙ABC
- 8 商人等ニ 乙ABC
- 9 立ツ行ク間 諸

卷五第二話

三四三六 興シ給ニケリ

6 御ケリ

7 傳給ケン

9 行山ニ

10 國王モ

13 可有キ事モ

13 多ノ人ヲ

14 恐テ怖テ

14 一人モ無シ

14 搔キ

11 頭ヲ

12 鬼一人モナシ

12 耽落シツ

13 屋共ニ

13 焼テ失ナヒツ

15 引具シテ

15 棲ヨリモ

北乙ABC

乙AB (乙Aは無シ)

底甲北乙 (北は耽に射テと傍書)

乙ABC

乙A

乙ABC

乙ABC 「栖ヨリモ」底甲北野大

AC

底甲北野乙

A

乙ABC

底乙ABC

★「可有キ事ニモ」底甲北野大「可有ル事モ」乙AC「可有コトモ」B (モの上にニ歟と朱補)

底野

★「恐テ怖シテ」底乙ABC大「恐ケ怖レテ」甲「恐ケ怖シテ」北野

乙ABC (乙ACは無、Bはナ)

A

三四四 1 吠ユ嗶テ  
生タルニ

乙 A C

乙 A B C

底甲北野乙

1 御ス

4 求ニ

★ 「求メニ」底甲野大「求メテ」北「求メ」乙 A B 「求」C

10 云ヘル

「云ヘトモ」底甲北野大「云ヘハ」乙 A C 「イヘハ」B

「古本は話者もしくは書記者が云ヘバというべきところを云ヘドモと混淆したものであろう。流布本はこれを、意通ずる如く「云ヘバ」と改めたものか。」

12 都方ニ

乙 A B C

14 獅子哭ヲ

A B

16 罰テ奉ルヘシト

乙 A C (Cの罰は討)

三四五 2 許ヘ

北野乙 A C (甲は破損のため不明)

3 脇ニ

乙 A B C

5 分テ給ハムトシテ

諸

6 根元ヲ

底乙 A B C

11 傳リツイテ今

乙 A B C

### 卷五第三話

三四五 16 何ニ

底甲北野乙 (甲の何は破損のため不明)

三四六 1 若シ其レカ

北野 A C (甲は破損のためカの部分不明)

2 敷テ

乙 A B C

- 6 臥セツ 底甲野  
 8 四ノ角 ABC  
 10 装束テ 底甲北野乙  
 10 弾テ遊フ 乙ABC  
 11 何クソト 乙ABC  
 12 可生カソト 乙AB  
 14 思フ 乙ABC  
 14 問ハムテ ABC「問ハンテ」乙  
 16 槌ニ 北BC（甲北野乙Cの傍訓タシカ）  
 2 盗人ノ 乙ABC  
 2 守リ渡スニ ★「守リワタスニ」ABC（Bはニにイと朱傍）「守リワタス」乙「守リ渡ワタス」  
 2 護頸ヲ 甲北野大（底 渡の偏は始め言偏を書く）  
 6 昵ヒク 甲北野A（野は護に朱傍訓マモル）  
 7 宣フ様 ★「昵シク」底甲北野大（北の昵は日偏）「昵ク」乙「昵ヒヲ」ABC  
 11 軟ラ歩ミ寄テ 底甲北野乙  
 11 其玉ヲ ★「軟ラアユミ寄テ」甲野乙AC（甲野のユは古体）「軟ラアイミ寄テ」北「軟ラ  
 12 國半國ヲ アクミ寄テ」底大「和ラ歩ミ寄テ」B  
 乙ABC  
 乙ABC



三四八 1 聞テ立リシニ

4 目ヲ

乙 A

乙 A B C

卷五第四話

三四九 4 為セヌニ

5 スヘキ

乙 A B C (C 傍訓「ナ」)

乙 A B C

8 占師

乙 A B

8 澤山

乙 A B C (C 傍訓サワヤマ)

12 有シ

★ 「不有ジ」底甲北野大「有ラシ」乙 A C 「アラシ」 B

14 女人ヲ

諸 (野はノ歟と朱傍)

14 聖人居所ト

乙 A B C

三五〇 1 梅檀ヲ

乙 A B C (C の梅は方偏)

4 衣着タル

乙 A B C

5 隠レタルラムト

乙 A B C (B のムはン)

9 五百ノケカラ

諸大「諸本、みな、かながきであるが、恐らく原典に「甄陀羅女」「緊陀羅女」とあるのを「ケカラ女」と耳で聞いたまま漢字をあてなかつたのではあるまいか。」

9 一當トシテ

底北野

10 謔クモテ

乙 A B C (B は不審紙を押ししたり)

11 歌詠シテ

乙 A B C

12 預ヲ

乙 A C (彦 A の頰は手×頁、乙はその変)

14 随ヒ給ヒナムカト

乙ABC (Bの給は玉)

三五二 1 怖ユ

乙AB (Bは不審紙を押ししたり)

2 踏破テ

乙ABC

3 怖シナカラ

B

4 女聖人ニ云ク

底甲北乙

6 腫タリ

★「腫ニタリ」底甲北野乙大「腫ニケリ」ABC

8 生シタリ

乙ABC

8 成テ

乙ABC

8 透ヒ行クヲ

底甲北野乙

11 白波

底甲北野乙

11 烟

★「燐ノ浪」底甲北大「烟ノ浪」乙B「烟ノ波」A「烟リノ波」C 野は脱

三五二 1 聖人チカラ女ヲ負

3 宛テハ

乙AC

3 乗下レハ

乙ABC

4 止事ナキ人也

B (Bはナリ)

卷五第五話

三五二 10 聖所遊居

底甲北乙

11 二ノ

底乙AB

11 山ノ中ノ

甲北野乙AC

|       |          |                 |
|-------|----------|-----------------|
| 15    | 懷妊       | A               |
| 三五三 3 | 草薺ヲ      | 底               |
| 9     | 火ヲ取ニ     | 乙 A B C         |
| 9     | 足毎跡ニ     | 乙 A C           |
| 10    | 云フニ随テ    | 乙 A B           |
| 12    | 其後ニ      | 乙 A B C         |
| 13    | 蓮花生セルヲ見テ | 甲北野乙 A B        |
| 13    | 宣ハク      | 乙 A B C         |
| 三五四 6 | 者也トモ     | A B C (Bの也はナリ)  |
| 6     | アラシト     | B               |
| 8     | 喚ヒ取テ     | 乙 A             |
| 10    | 妓樂ヲ      | 乙 A B C         |
| 13    | 還リ着キ給ヌ   | 乙 A             |
| 三五五 2 | 其蓮花ヲ     | 野乙 A B          |
| 3     | 五百ノ菜ニ    | 諸 (北は始め藥とし葉と訂す) |
| 9     | 持タム      | 乙 A B C         |
| 15    | 涅槃ニ      | B               |
| 15    | 鹿母夫人     | 底乙 A B C        |
| 15    | 辟支佛骨ヲ    | 甲北野乙 A C        |

卷五第六話

三五六 6 □國ニ

7 其時

7 橋ニ

8 開見ニ

8 日来ヲ経ル

13 彼ノ國ニ

15 不可恐

三五七 2 向テ時

諸大

A B C

乙 A B C

乙 A B

諸(経に甲北傍訓フ、C傍訓へ)

乙

B

★「向フ時ニ」底甲北大「向ノ時ニ」乙 A C (Cの時はトキの合字) Bは脱

卷五第七話

三五七 13 蜜ニ

13 心誤リテ

三五八 1 太子二人ノ

1 為ニ

4 香カユ

4 虵

4 偏シ付テ

6 云

底甲北野乙

乙 A

乙 A B C

甲北乙 A B C

底 A

乙 A C

A C

★「云フ」底甲北野大「云コト」B (コトは合字) フィと朱傍「云ソ」乙 A 「云ゾ」C

10 修テ行ル

甲北野 A B 乙 (乙の修は変)

10 何ソ

乙 A B C

13 其時

乙 A B

14 語り給フ

乙 A B C (Bの給は玉)

15 本ノ如ク

乙 A B C (Cは朱補中)

16 如ク也

C

三五九 1 此レナリ

★ 「此レ也」底甲北野乙大「是也」 A C 「是ナリ」 B

卷五第八話

三五九 6 少シ

乙 A B C

11 問給フ

乙 A B C (Bの給は玉)

14 悶絶辯地

底甲北野乙 A C (彦乙 B 辯は糸偏、Cはそのま)

16 樹ニ

底乙 A B C (底ニは後加)

三六〇 3 我カ願ヲ

乙 A C

卷五第九話

三六〇 12 其時

C

15 供養トシ給ハム為ニ

乙

三六一 7 寵愛シ給フ

底乙 A B (底はシの次にテを書き、その上に給を重書、

Bの給は玉 Bの事はコトの合字)

9 不可歎思ト

B

10 身ノ

乙ABC (Bはノにニイと朱傍)

11 夫生趣輒死死滅為樂ト底甲北野(底は輒の上にもと趣ありてみせけち、彦北野甲はこれを解せず口×趣に

作る、北は滅は滅、底甲北野は樂)

12 大ニ慈心ヲ

乙

三六二 2 人天

乙ABC

3 上ニ

底乙ABC

4 猶シ

乙AC

5 瘡

大「疵」流布本

7 本ノ身ノ如クニ

底乙BC

8 大王ト

底乙ABC

卷五第十話

三六三 1 法ヲ

ABC

1 一日ニ

乙ABC

8 文

甲北野乙AB

9 云ハ

乙AC

卷五第十一話

三六三 14 入り

諸(北はりをヌと訂す)

16 一切衆生ノ願ヲ

甲野乙B「一切衆生ヲ願ゾ」底大「一切衆生ヲ願ヲ」北「一切衆ノ願ヲ」A C

「最初の文節の助詞が古本においてヲであることはほぼ疑いない。これは書き手もしくは語り手の当初の表現意識が、たとえば「一切衆生ヲ(救ヒ給フ)」とでもいおうとしたことを意味する。「願ゾ」は「願ヲ」の強調表現であろう。」

三六四 3 頼ム

4 其時

B

4 巖ニ

乙 A B C

6 首ヲ脳返テ

乙 A C

卷五第十二話

三六四 14 持チ給ケリ

15 童子ヲ

★「持チ給ヒケリ」底北野大「持チ給ニケリ」乙 A C「持チ玉ヒニケリ」B (甲は破損のため不明)

三六五 4 如豆雲

乙 A B C

三六五 4 如豆雲

乙 A B C (Bは豆に浮歟と朱傍)

卷五第十三話

三六五 15 事ヲ捨テ

乙 A B C (B Cの事はコトの合字)

三六六 2 慈タル

乙 A B C

7 栄

甲北野乙 A B C (甲北野乙 Aは菜の変、北は葉の変を傍書、野 Bは朱圈点)

7 栝

乙 A B (Bは不審紙を押ししたり)

- 7 里ニ  
9 魚類等ヲ  
11 云フニ  
11 癌セスメ  
12 求メ行凡  
12 東ニ  
14 人々  
16 求メ奉ラムトス  
16 焼テ  
三六七 1 火ヲ取テ  
1 若シヤ  
3 火ヲ温ナムト  
3 穴増クト  
6 烟也  
7 可思出之

底乙AC

甲北野乙AC

底甲北野乙

乙AB (彦乙ABの癌は変)

乙ABC (C傍訓モト・ユケ、乙ABCはトモ)

乙ABC (Bは更イと朱傍)

乙AC

乙AC

甲北野乙AC

底ABC

乙AC

乙ABC (Bは朱補中)

★ 「穴増クト」野乙ABC (野朱傍訓アヤニ、C傍訓アナニ) 「窟クト」底甲北大  
(北は穴憎と訂す)

乙ABC (Bの也はナリ)

乙AC 「可思出シ」底北野大「思ヒ出スヘキナリ」B〔甲は破損ノタメ不明〕

「本集独特の形式的な結語がないために、攷証以下、闕文のある如くにあつたのであるが(底甲北Bの諸本は一行あけてある)、これで恐らく本文は終わっていたのであろう。むしろ、結語をつけ忘れたところに、本集編纂上の一過程を知ることができよう。」ただし彦はあけてない。



卷五第十四話

三六七 15 腹ニ

乙 A C

15 一ツヲハ背ニ

乙 A B C

15 養ヒシニ

乙 A C

16 付拾ハ

乙 A C

三六八 1 出ナムハ

乙 A B C

2 去ル

乙 A B C

3 山ノ洞ニ

乙 A B C

4 我等ヲ

大「このまま解すれば感動助詞。或は野村本の傍書「ヲ」に従うべきか。攷証はハに改め、理由は別に示さない。」

4 子共ヲ

北乙 A B C

7 行テ

乙 A B C

8 後ハ

乙 A B C

10 師子ニ預ケ奉ラム

乙 A B C (B Cは獅子に作る)

11 其ノ程ニ

★「其ノ程其ノ程」底大「其ノ程」甲北野乙 A C 「其程」 B

11 置給ハムト

乙 A C (乙 A Cはムガン)

11 可ン然

乙

13 猿ノ

乙 A B C

三六九 4 菓瓠ヲ

乙 A B C

4 子共ヲモ

底甲北野

7 我カ事

乙 A C (Cの事はコトの合字)

7 聞テ給サルヘキ悲ス

乙 A

8 吠ユ嗶ラムニハ

北 A C

8 御シナムヤハト

乙 (乙はムガン)

13 猿ノ子ニカ

底甲北野

16 猿涙ヲ流ス

諸 (Cはスなし)

三七〇 3 今  是也

「今  此レ也」大

「内閣本 A 及び野村本朱校筆「提婆達多」に作る。話の筋からみれば、提婆達多であることに疑いはない。本集の編集は、原典の記事に疑をさしはさみ、しばらく決定を保留したものであろう。」

卷五第十五話

三七〇 13 大王

諸

14 報ヲ

乙 A B C 「報ノ」底甲北野大

16 宣ナリトナム

乙 A C

卷五第十六話

三七一 10 可進之

乙 A B

13 問テ云ク

底甲北野乙

14 見付タリキ

乙 B

卷五第十七話

三七三 1 嘸庶那國

2 食物ノ乏クテ

3 米ノ乏シキ

4 此國ノ國王

5 取テ

6 食スレトモ

10 涌キ従ル

11 只大キニ成テ

14 取テ國王此ヲ

15 罪ニ可宛ト

16 我

16 用ヒ給ハ、

三七二 2 此菓子

3 大臣

3 云テム

4 令聞ヨト

5 百二十餘

10 悦テ

甲北野 (野は五云此処脱文アランと傍書、甲北野は国)

乙 A B C (A B C の充は宛)

乙 A C

乙 A B C (B の給は玉)

A B C

諸

乙 A B C (B のムはン)

乙 A B C

乙 A B C

乙 A B C

乙 A B

乙 A B

乙 A C

B C

乙 A B C

乙 A B C

乙 A (乙の従は変 三水に作る)

甲野乙 A B C (甲は大を書きてその上に成を重書) 「只大キニ大キニ成テ」底北大

- 15 駿キ驚キ  
 15 軍ノ数  
 三七四 1 賞シヌ  
 1 歴ハレタレハ  
 6 此神也  
 8 不闕シテ  
 8 祭儲テ  
 8 焼キ殺シテムト  
 11 夢醒ヌ  
 12 鞍  
 12 待ツ  
 13 築キ  
 15 呉テカク  
 15 馬ニ  
 三七五 3 逃去ヌレハ  
 5 樂ミ年カリ

「大キニ」にを二つ重ねたのは、行文ではなくて強調的表現と考えられる。ただし、動詞ではないので、他と全く同一視するわけにもゆかぬが。」

★「驚キ驚テ」底甲北野大「驚キ騒キ」乙AB「驚キ騒キテ」C  
 甲北乙BC

乙ABC（賞の左傍に朱圈点）  
 北AC

★「此レ神也」底大「此レ神ナリ」B「此ノ神也」甲北野乙AC  
 乙ABC

諸

底乙ABC（Bはムをンに作る）「焼キ敏シテムト」大「焼キ敏シユムト」甲野（甲はユの如く書きてエと重書す）「焼キ敏シヌムト」北

「テの字体、虫喰いの為に不分明の故か、諸本何れも異文あり。」

乙ABC

★「鞍ヲ」底甲乙A大「鞍ヲ」北野BC

乙ABC

AB

乙AB（呉は異体 Bは不審紙を押ししたり）

ABC

B

★「樂ビ多ケリ」底甲北野大（北はケをカと訂す）「樂ミ多カリ」乙ABC（Bの

樂は灰と書きて朱訂せるもの

卷五第十八話

三七五 10 第十八

甲野乙ABC

14 没シ

ABC

15 呼ヲト

★「叫フト」底甲北野大「呼フト」乙ABC

三七六 3 生ル「ハ

乙ABC (乙Aは事)

4 何事ヲ以テ我レハ

乙B (Bはハに朱圈点)

7 哀ニソ

乙AC

三七七 5 其時

B

5 飛テ行テ

乙ABC

7 用ヒ給フニ

北乙ABC (Bの給は玉)

12 任テ

B

14 知り給ヘルソヤ

AC

15 来ル也ト

乙ABC

三七八 1 汝命ヲ

B

2 為シ時ニ

乙AC (Cの時はトキの合字)

5 背キ

乙ABC

5 其ノ國ニ

甲北野 (甲北野は国)

9 忘ル、

乙ABC

10 九色ノ鹿ハ

乙ABC

卷五第十九話

三七八 14 天竺龜

底甲北野乙

15 釣テ

★「釣りテ」底甲北大（甲北傍訓ツ）「釣りテ」野乙ABC

三七九 1 直ヲ

乙AC（乙ACは頸）

7 舟ヲ

乙ABC

9 待ツ、

乙AC

10 遠眺ニ

乙A

12 令乗ハ

乙AC

三八〇 1 漕テ行ク

乙AC

4 漕寄ル

B

10 墓アルニ

AC（ACは有）

10 入ヌ

ABC

14 仕ムトスル

★「仕ハムト為ル程ニ」底甲北野乙大「仕ハムト為ル」AB（Bのムはン）「仕給

14 何事ニ来ツルト

ハムト為ル」C  
乙ABC（Cの事はコトの合字）

三八一 3 是ハ

乙

4 無カ

諸（諸は無）

5 云ハル、ソ

乙B

6 物共

乙 A B

8 居ラシメ

乙 A

8 引臥ラレテ

乙 B

13 鳴キ嗶ラセム

底甲北野 A

16 王宮ニ

乙 A B C

三八二 3 崇リト

乙 A B (Bの崇は変宗と朱訂)

6 有様

乙 A B

卷五第二十話

三八二 1 2 天竺狐

底甲北野乙

三八三 2 狐値ヌ

野乙

5 王メリ

底甲北野 (北は王の右下にナと傍書)

5 畏ナラムト

野乙 A B C (野はナにマ 傍訓カシコ、Bは右傍に本マ、左傍に畏には様敷と朱傍)

5 思テ候ヲ

諸 (Bは思に畏敷と朱傍)

10 極タルヲ

乙 A B C

12 師子申サク

乙 A B C (B Cは獅子に作る)

13 狐ノ身ヲ以テ

乙 A B C

15 持上テ

乙 A B C

15 損シ

乙 A C

15 世間ヲ

底甲北乙

三八四 4 眼ノ見

乙 A C

6 頸ノ毛ヲ

北乙 A B C

6 轉シ落ヌヘク

乙 B

11 落テ迷テ

乙 A C

12 燐ヲ

B 野 (B は不審紙を押ししたり、野の燐の偏は矢 右傍に朱圈点)

14 狐ハ

乙 A B C

15 寫許ニ

乙 A (乙 A は象)

三八五 1 合セテ

B

卷五第二十一話

三八五 4 天竺狐

底甲北野乙

6 獸ヲ恐シケリ

底甲北野

7 逃ケ去ナムト

乙 A C

11 大地ニ

底甲北野乙

11 トモ

★ 「共ニ」 底甲北野大 「共」 乙 A B C

13 引上ヨ

乙 A B C

三八六 1 汝カ

乙 A B C

卷五第二十二話



三八六 10 東城國

諸

13 西城國

野乙ABC

三八七 2 返シ遣セハ

乙AC

4 立テ

乙ABC (Bはテに朱圈点)

10 粮飯ヲ与ヒ

乙A

14 弟ヲハ

底甲北野B

14 可還来キニハ

乙AC

15 二子ハ

底甲野

16 然レハ

乙ABC

三八八 1 譬ヒ

底甲北野乙

6 居タル

諸

8 善生人ト

乙ABC

9 骸ヲ邊ノ

底BC

16 死給ヒナムヤト

乙AC

三八九 3 善生人ハ

乙ABC

4 今ノ

乙ABC

卷五第二十三話

三八九 11 咲ヒ夢ツル

底甲北乙 (甲北は蔑と訂す)

16 受給ソヤ

乙AC

三九〇 3 麗シキ

乙ABC「麗シヤ」底甲北野大「麗シカ」の譌か。

3 汝等カ

乙ABC

3 供養物ヲ

乙B

6 世ノ人ノ

底甲北野乙

6 云ソト

★「云フト」乙ABC「云ゾ」底北野大（ソの右下に北はトを傍書、甲は云の下に

ト歟を補入）

卷五第二十四話

三九〇 11 住ス

甲北野乙AB

12 亀出テ

諸（諸は龜）

13 鶴亀一雙ニ

諸

15 明ニ

乙AC

16 飛ヒ播ル事

底甲野乙A（播甲野は旁、乙は偏が変）

三九一 1 荒野ヲ

乙AC

4 小池万内タニ

乙A

5 背ニモ

乙ABC

5 朧へムモ

乙ABC「朧へムモ」底甲北野大

6 朧ヘテ

「明証はないが内閣文庫本C傍訓クハフに暫く従っておく。」

9 更ニ

底乙ABC

9 更ニ

底甲北野B

卷五第二十五話

10 池ノ万内ニ

乙 A C

12 此カト

諸

13 守口攝意身犯

底甲北野乙

三九二 4 痛有テ

乙 A B C (乙は痛の字体不整)

6 何ヲ、テ

甲野

6 腹ノ痛ノ

A B C

7 豊也不ヤト

甲北野乙

8 乏シキ也

A

9 其時ニ

乙「其所ニ」A B C 「其ノ時ニ」底甲北野大

「所」の方が、意、通じやすいようだが、このまま「其の時に」と解せられなくもない。」

14 傍ノ木ニ

底乙 A B C

14 我肝

乙 A

16 得給ヘト

甲北野乙 B (Bの給は玉)

三九三 2 到又

乙 A B C

3 下ル、一々ニ

乙 A B C (乙 A B C は「下ル、一々ニ」)

7 愚癡ナル

乙 B

卷五第二十六話

三九三 10 天竺林中

14 此人

14 道ヲ

16 知ヌ

三九四 1 指テ

3 繫レテ

4 國王ニ

4 行キ

6 角被捕ヌレハ

7 喰ハムト

卷五第二十七話

三九四 13 天竺鬲

13 足踏立謀人

14 通ル間ノ

16 堀

三九五 2 山ノ

底甲北野乙

★「此ノ人ノ」底大「此人ノ」B「此ノ人」甲北野AC 乙は脱

乙ABC

乙AB

底AC

乙ABC

乙ABC (乙ABCは国)

北ABC

乙AC

野AC

底甲野乙

乙

乙AB (Bはノに朱圈点)

大「堀」流布本

「堀は窟の異体字であるが、ここでは掘もしくは堀の異体字として用いたものであろう。」

乙ABC

3 東西ヲ

諸

4 早ウ

底甲北BC

5 待タル程ニ

乙B

6 悦ヒナメリト

★「カク喜ナメリト」底甲北大「カク喜ナリト」野「悦ナメリト」乙A「悦フナメリト」B「悦ブナメリ」C

8 指遣セテ

C  
諸（底甲の捕は変 木偏）

9 捕ヘテ

甲北野乙

10 扶セム

諸（ACのムはシ）「抜□ムトテ」底大

「底本、破損のため不明だが、或はセとあつたものか。」

卷五第[二十八]話

三九六 3 天竺五百商人

底北野乙

6 水流ル趣テ

乙AC

6 垵ニ

乙B（Bは不審紙を押し垵と朱傍）

6 入ルカ如シ

★「入ルカ如シト」底大「入ルカ如トシ」甲北野乙AC「入ルカ如シシト」B  
乙ABC

9 免レヨ

卷五第二十九話

三九七 5 食セシ取五人ヲ

底甲北野乙A（取 底はみせけち、北は取カと傍書）

卷五第三十話

三九七 10 舍脂三日

甲北野乙（北は三日を音と訂す）

11 不出給ル前二二ノ

乙 A C

14 アルカト

★ 「有ルカト」乙 A 「有カト」 B C 「有ルナリト」底大 「有ルカ」甲北野（北はカの右下にとと傍書）

三九八 3 仙人ノ法ノ

乙 A C

卷五第三十一話

三九八 6 天竺牧牛

底甲北野乙

8 失ヌ

A B C

8 所行

諸（底は行の右傍に顛倒符あり）

11 怖ヒ

諸大 「恠」の譌であろう。

12 此牛行ク山ニ

★ 「此牛行山ニ」 C 「此牛ノ行山ニ」 B 「此ノ牛行山ニ」乙 A 「此ノ牛片山ニ」底甲北野大

13 開ケキ

乙 A C

三九九 2 飲入ツ

★ 「飲入レツ」底乙 A B C 大 「欲入レツ」甲北野（欲に甲は飲カ、北は飲と傍書）

2 身即

乙 A C

8 身ヲ変セル石也ト云

乙 A B C （B の也・云はナリ・イ、乙 A B C はトモ）

へ 厩

9 士ト

A B C

9 其所ニ

★「其所ニ」乙 A C 大「其所」甲北野「其処ニ」B〔底は破損のため所の下  
不分明〕

9 一片ヲ

乙 A B C (乙の片は変)「一斤ヲ」底甲北野大(甲は片ナリと傍書)

卷五第三十二話

三九九 13 流遣他國語

乙 A B C (乙 A B C は国)

16 不見事

★「不見ザラム事□」底大「不見ザラム事」諸

四〇〇 3 牡馬

乙 A B C

11 國王ノ

乙 A B C (乙 A B C は国)

11 何ト

乙 A B C

四〇一 2 沈ム方ヲ

甲北野乙 A B (甲北は沈の字不整、甲は沈歟、北は圈点を附す)

4 如此ク

「如此ノ」大 底本、ノの字体不分明。

5 可為キト

A B C

5 難思得キ事也ト

A B C (Cの事はコトの合字)

8 何タル「ノ

A B C (A B は事)

8 アルニヤト

野乙 A B (野乙 A B は有)

9 此事ヲモ

★「此ノ事ヲモ」底乙 A B C 大 (Cの事はコトの合字)「此ノカラモ」甲野「此ノ

11 水量ル

コトヲモ」北  
甲北野乙 A B

13 如ク 

乙 A B

15 褒メ感シテ

底甲北野

四〇二 1 互ニ

乙 A B C (乙の互は異体)

2 挑ナミツル

底甲北乙

2 中吉ク

底甲北野乙

6 今始タル故ニ

A B C

8 候フト

乙 A C 「候フトモ」底甲北野大(北はモをテと訂ス)

「流布本系はすべてモがない。その方が文意通じやすいが、古本共通のモを強いて解釈するならば候フトモ思ヒテの意が含まれているものであろう。」

8 罷出ツ

乙 A B C (Bはツに朱圈点)

9 候ハサラムシカハト

乙 A B C

## おわりに

『今昔物語』巻五の本文の異同を見ると、彦根城博物館所蔵『今昔物語』と同じ表現を多くもつのは流布本系諸本(内閣文庫本 A B C、東大本乙)である。これまでの巻では、内閣文庫本 B の表現が彦根城博物館本の表現と一致する箇所が多く、それは、空白などの形式と同じ傾向にあった。しかしながら、巻五の場合は、内閣文庫本 B との一致度は他の流布本と同じ程度である。巻五では、巻二と同じく、鈴鹿本という原本に近い本が残っているせいか、古態を残すとされる東大本甲、東北大本、野村本と一致する箇所は非常に少ないという結果が得られた。

巻四では、彦根本は、古い字体をそのまま使う意識が垣間見えたが、巻五においても、そうした古本に則ろうとす



る意識があるように見える。巻五第一九話「天竺龜」、巻五第二〇話「天竺狐」、巻五第二一話「天竺狐」巻五「天竺林中」巻五第二七話「天竺象」巻五第二七話「天竺五百商人」巻五第三一話「天竺牧牛」は、古態を残すとされる鈴鹿本、東大本甲、東北大本、野村本、流布本系の東大本乙には天竺の字があり、彦根本は天竺の字を全て有する。その他の流布本系諸本、内閣文庫本ABCでは、天竺の字を有さない。巻五では全体として、流布本系の諸本と表記が一致するにも関わらず、天竺という国名については、古本系諸本に依っていることになる。考えられるのは、古本系と流布本系の両書が手元にあり、古本系に依りつつ、誤脱などがあると判断した場合は流布本系によった、あるいは、古本系に近い東大本乙のような流布本をひき写したかのいずれかであろう。

これまで、彦根城博物館本は古態本と流布本の中間的な本として位置づけてきたが、巻四、巻五にいたって、古態本の表記や字句を有することが判明したことにより、改めて、彦根本の位置づけを考える必要がでてきた。今後、古本への表記や字句との関連を目配りしつつ、その位置づけを考えていくこととしたい。

### 注

- (1) 中根「未紹介本」今昔物語「彦根博物館所蔵」についての「考察」〔愛知県立大学説林〕53号 二〇〇五年三月
- (2) 中根「彦根城博物館所蔵」今昔物語「巻一」の本文の位置づけ〔愛知県立大学文学部論集〕54号 二〇〇六年三月
- (3) 中根「彦根城博物館所蔵」今昔物語「巻二」の本文の位置づけ〔愛知県立大学文学部論集〕55号 二〇〇七年三月
- (4) 中根「彦根城博物館所蔵」今昔物語「巻三」の本文の位置づけ〔愛知県立大学文学部論集〕56号 二〇〇八年三月
- (5) 中根「彦根城博物館所蔵」今昔物語「巻四」の本文の位置づけ〔愛知県立大学文学部論集〕57号 二〇〇九年三月
- (6) (1)に同じ。
- (7) (5)に同じ。

本稿の中で引用した旧日本古典文学大系の校異は、『今昔物語集一』山田孝雄 山田忠雄 山田英雄 山田俊雄 岩波書店 一九五九年によるものである。